

## 馮叔鸞と民国初期劇評

藤野真子

元代の雜劇から明清の南曲(崑曲)を通じテキスト批評が中心であった中国戯曲において、実際の舞台上演に関する劇評は清朝中葉以降の京劇成立を待たねばならなかった。さらに、脚本・俳優の演技・演出等を総合的に批評する近代的劇評は、革命運動の言論発表の場として出版メディアが発達していた清末上海で初めて行われ、大小の新聞・雑誌に専門の劇評コーナーが陸続と誕生した。当時、北京を中心に発達して来た京劇は既に南下して上海に定着、多数の劇場で盛んに上演されていた。こうした情況のもと、劇評を専門とする文人達が清末から民国初期にかけて登場し、大きな影響力を持った。

この「劇評家」達のスタンスは様々で、鴛鴦胡蝶派の文人、柳亜子のような旧知識階層の革命派、「戲迷」とも称される演劇愛好者、さらには演劇の近代化を唱える新知識人まで多くの人々が演劇に関する文章を手掛けていた。しかし、概して守旧的と見なされる「演劇愛好者」の中にも、実際には京劇をはじめとする中国伝統劇を西洋演劇と同じく、大枠での「演劇」という地平で捉え直そうと模索する動きがあることは、あまり注目されてこなかった。

馮叔鸞(一八八三?—一九四〇年? 筆名は馬二先生)はそうした演劇愛好者系統の劇評家として、比較的明晰な主張を持ち、独自の演劇論を展開した人物として注目に値する。従来、新文化

運動をおおむね肯定してきた現代中国の文学史において、彼のように白話運動(一九一七年)が興った後も文言を用い、文章を書き続けた文人は正当な評価を受けることが少ない。これは小説・エッセイ等いかなるジャンルの文芸でも同様で、劇評もまた例外ではない。しかし、彼の著書や新聞雑誌に掲載された一連の文章は、当時の演劇動向に関する資料的価値を持つと同時に、京劇をはじめとする伝統劇に対し非常に深い知識的蓄積を持っていたこと、また日本を経由して流入した西洋演劇(新劇)に注目しその優点を撰取しようとしていたことなどが内容から窺い知れ、その思想的価値を看過するのは民国文芸史上大きな問題であると思われる。

一九一三年頃北京から上海に移動・定着した馮叔鸞の文章は、大小の新聞・雑誌など各出版メディアに残されているが、最も著名なのは『嘯虹軒劇談』(一九一四年)と題して出版されたそれらの集大成であろう。この書には当時の伝統劇・新劇(新戯・文明戯)動態の詳細な記録と共に、馮叔鸞自身の演劇観、特に劇評観がはっきりと表れている。彼は同書「上海聴戯者之程度進歩矣」において、「本場の北京京劇を知る自分が、歴史の浅い上海京劇界・京劇愛好者に知識を啓蒙する」という自らの役割を認識した上、他の章で劇評家の必須条件を以下のように述べている。

- ① 劇評家は戯曲をはじめとする文学全般に通底していなければならない。
- ② 観劇経験が少なく、各演目の背景を熟知していないものが劇評に携わってはいけない。
- ③ 評価基準を確定できないものが個人的好みで俳優の優劣を断

定してはいけない。

④非科学的であるとして戯曲の伝奇性を否定するのは誤りである。

⑤美辞麗句を用いた詩詞(韻文)を用いたものは劇評とは言えない。

劇評の持つ意味合いとしては、定期刊行物という文字メディアに載ることでの「速報性」「社会教育性」「観客への知識伝達」「俳優・舞台制作者への啓示」などが考えられるが、馮叔鸞の弁は特に後二者を重視したものと見なしている。時に今日的観念からすれば至極当然のことも述べられているが、こと俳優の技芸のみに着目し、個人の好みに照らし合わせて著された劇評が主流であった当時、劇評のプロフェッショナルとしての自覚を強くもち、冷静な視点の保持を呼びかける馮叔鸞の主張は同時代人の意識の先をいくものとして再評価する必要がある。

また該書では、新知識人の牙城であった雑誌『新青年』が「演劇改良特集」を組み、伝統劇の否定・改革を主張する(一九一八年)よりも早く、伝統劇の保持すべき点・改良すべき点各々について分析を行い、伝統劇改革に関する馮叔鸞自身の見解が述べられている。なお、『新青年』には伝統劇を旧時代の遺物として徹底的に否定する錢玄同ら以外に、歐陽予倩ら伝統劇の素養を備えた新知識人が寄稿、伝統劇を今日に相応しい形へ改革することを提唱しているが、『嘯虹軒劇談』の中には彼らの論を先取りした言も見受けられる。しかし、「劇評家には演劇や演劇に内在する音楽・美学以外の学問への目配りが必要である」とし、且つ劇評の持つ社会教育作用を強調するのが欧陽予倩ら『新青年』執筆者

の特徴であるのに対し、演劇界・演劇愛好者内での影響のみを考慮した馮叔鸞の言は些か閉鎖的であり、それが彼ら旧知識階層の限界点でもあったことは指摘しておかねばならない。

同年、周劍雲編『鞠部叢刊』に寄稿したのち、馮叔鸞の演劇に関する言及は管見の限り極端に少なくなる。しかし、馮叔鸞とその著書を中心に、新文化運動前後における上記周劍雲や鄭正秋といった旧知識階層出身者の手になる劇評を総覧・再評価すること、民国初期、特に上海における劇評の実態について、新たな像を浮かび上がらせることが出来るだろう。その際、当時の新聞・雑誌の出版状況を彼らの活動とリンクさせることも必要となってくる。

一方で、こうした資料からは「話劇」として体裁を整える以前の新劇が、知識層に如何に受け入れられ、その手で改良されたのかを窺うこともできる。十分に理解されているとは言いがたい「文明戯」と総称される早期話劇の動向を、伝統劇との併存・交流・部分的融合に着目することで明らかにしていくことも、また今後の課題である。